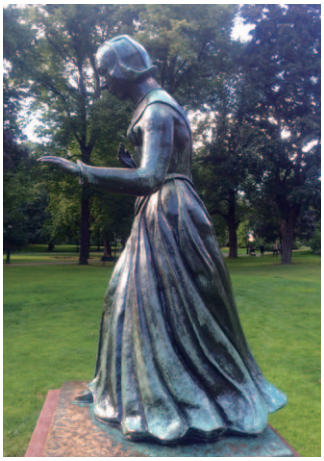
学校法人 実践女子学園
下田歌子研究所 ニューズレター No. 05
2015年11月

# スウェーデンにおける女性運動の先駆者たち：男女機会均等への長い道のり

早稲田大学 地域・地域間研究機構 研究助手
清水 由賀

澄み渡る空、頬にやさしい爽やかな風。夏のスウェーデン、女性運動の先駆者たちを各地に訪れた。王立図書館を囲む、ストックホルム中心地では最も大きな公園であるフムレゴーデンのなか、颯爽と風を切りながら前に進む貴婦人風の女性。スウェーデンで最も大きな教会のうちの一つであり、その建築様式が目を引くエンゲルブレクト教会向かいの小さな公園で、強烈な意志を胸に抱きながら、静かに佇み思いを馳せる女性。穏やかなランスクローナの海岸沿いを散歩していると、ふと道の先に現れる、水平線の先を毅然と見つめる女性。フレデリカ・ブレーメル、エレン・ケイ、セルマ・ラーゲルレーヴである。また、銅像に出会うことはできなかったが、彼女たちを支え、育て、次代に引き継いだ女性、ソフィ・アドレシュパッレがいることも忘れることは出来ない。

スウェーデンは、世界経済フォーラムが発表する「ジェンダー・ギャップ指数」で、142カ国中、第4位である。初回の2006年、翌2007年は1位、2008年は3位、2009年から2014年は毎年4位であった。（日本は104位） ここに至るまでに、女性の自立と自律、そして地位向上のために尽力した、最初の草分けとなった彼女たちの功績は大きい。


フレデリカ・ブレーメル

フレデリカ・ブレーメル Fredrika Bremer（1801-1865）。「女性運動のパイオニア」。彼女の銅像の裏にはそう刻まれている。フィンランドで生まれ3歳の時に家族でスウェーデンに移り住んだ女性作家である。女性の抑圧状況に関する多くの小説を発表して問題提起をした。1884年には、後に大きな政治的機能を果たすことになる、彼女の名を冠した女性団体がソフィ・アドレシュパッレ Sophie Adlersparre（1823-1895）によって設立された。フレデリカ・ブレーメル協会は現在に至るまで130年以上にわたり、男女機会均等（Jämställdhet）のための活動を続けている。

エレン・ケイ Ellen Key（1849-1926）。『児童の世紀』、『恋愛と道徳』、『恋愛と結婚』などは日本語にも訳され、『青鞜』を通して日本の婦人運動にも影響を与えた女性である。彼女の結婚観や子どもの教育観は当時のスウェーデンにおいてはあまりに斬新であり、圧倒的影響力とともに激烈な批判も伴った。しかし彼女は批判にも屈せず、いまも女性の現実と未来に想いを巡らしているのだろうか、水と緑に囲まれ、静かに佇んでいる。

エレン・ケイ

セルマ・ラーゲルレーヴ Selma Lagerlöf（1858-1940）は、『ニルスのふしぎな旅』で有名な世界的女性作家である。1909年にはスウェーデン初の女性ノーベル文学賞受賞者となった。20クローナ札には、表に彼女の肖像、裏にはモルテンに乗って空を飛ぶ

ニルスが描かれている。ソフィ・アドレシュパッレはフレデリカ・ブレーメル協会を設立したのみならず、エレン・ケイを発掘し、セルマをも支援し、育てた。セルマ自身は女性運動に積極的に携わった人物ではないが、彼女の生き方、功績そのものが、多くの女性に影響を与えたことは明らかであろう。教師として赴任したランスクローナには今、海の向こうを毅然と見つめるセルマが立っている。右手に本を持ち、左手で髪をかきあげ背筋を伸ばして立つ姿は、あまりに清々しい。

セルマ・ラーゲルレーヴ

国際比較で見ればスウェーデンは世界でも最も男女機会均等の進んだ国の一つである。では、具体的にはどのような状況か、スウェーデン統計局が毎年発行する『女と男 *På tal om kvinnor och män* 2014年版』から紹介したい。20- 64歳のうち、労働市場参加率は女性83%、男性89%、労働市場参加者のうち女性の就業率は77%、男性は82%。25 - 44歳のうち高等教育以上の学歴をもつ割合は男性39%に対して女性は51%と、女性が12%高い。平日における有償労働時間は男性が女性よりも90分ほど長く、無償労働時間は女性が男性よりも1時間長い。所得補償育児休暇日数は、両親が取得可能な全480日のうち男性が25%、女性が75%を取得している。女性管理職の割合は、民間セクターが29%である一方、公的セクターでは65%にのぼる。議会における女性議員の割合は1994年以降、常に40%以上で2006年には最大で47%にのぼった。議会内委員会も女性が合計で40%以上を占め、住宅、福祉、教育に関する委員会では59%にのぼる。内閣閣僚に関しては首相を除く23名中12名が女性と、半数である。スウェーデン史上最年少大臣が28歳のボスニア出身女性であるところはスウェーデン的である。

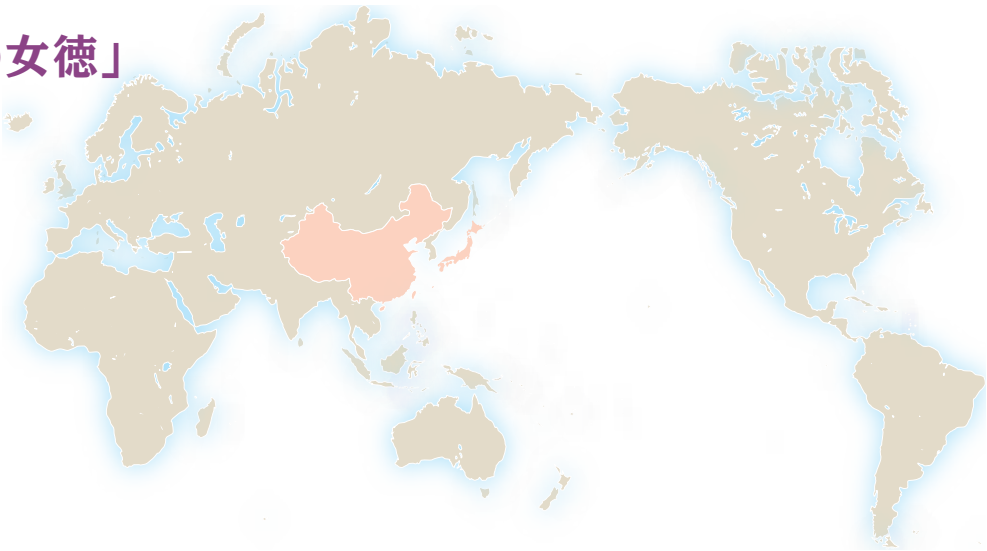
以上のデータからは、「さすが」「まさか」と驚く部分と、「やはり」「まだか」と口をつぐまざるを得ない部分の双方が見える。性役割二元論は、他国と比べれば大きく説得力を失っているものの、スウェーデン女性から見れば、まだまだもどかしいところもあるのかもしれない。21世紀のいま、先駆者たちが道を切り拓いた時代と比べれば女性の地位は大きく向上した。しかし、あらゆる分野における意思決定過程での多様性の拡大は、さらに求められる。自立・自律した個人が、意思決定過程に参画して、自分の歩みたい人生、身を置きたい組織、住みたい社会を、自分で選択する。道のりは、まだまだ長い。

水平線の向こうを見つめるセルマ

エレン・ケイやセルマ・ラーゲルレーヴが活躍する時代のスウェーデンに、1893年から2年間の留学期間に訪れた下田歌子は、そこで何を思ったであろうか。

# 下田歌子と「東洋の女徳」

広島大学 文学研究科 博士課程後期
郭　妍琦



明治初期に男女平等、母性擁護等の女性問題を近代的な意味で初めて取り上げたのは、森有礼、福沢諭吉、中村正直等の男性たちであった。下田歌子は、そうした議論に初めて参加した女性として注目に値する。下田が女性として、どのようなことを女性に要求したか、それは男性の思想家とどのように異なるか、そして下田本人がそれをどのように実践したかはとても興味深い問題である。また、下田は実践女学校に中国からも女子学生を受け入れ、中国側でも「女子教育の大家」と呼ばれるほど影響力をもったことから、中国の女子教育においても、極めて重要な存在であると言える。このような興味関心から、私はこれから下田の研究を進めていこうと考えている。

大井三代子によれば、下田歌子により初めて明確に打ち出され明治期女子教育の基本となった良妻賢母主義は、従来の日本女性の美徳とされているところをそのまま残し、近代的知識や教養を身につけた西洋婦人の姿を重ねたものである（「明治の婦人雑誌―下田歌子と「日本婦人」」）。また、陳妊湲によれば、下田が教育目標として賞揚した「良妻賢母」とは、彼女が欧州諸国で目にした女性たちのように、上質な労働力として国家に寄与できると同時に、精神的に押し寄せてくる西洋文明に対抗できるような、「東洋女徳の美」を守り抜く女性を意味した（『東アジアの良妻賢母論　創られた伝統』）。つまり、下田が考えた「良妻賢母」像は、西洋の婦人のような知識と教養を備える一方で、精神面では日本または東洋の美徳を維持することによって、西洋文明に抵抗できる女性像であった。

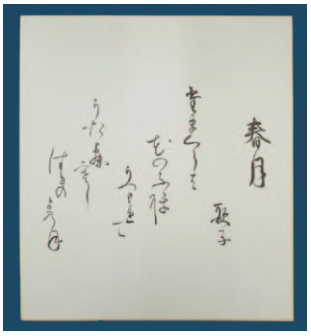
しかし、下田が求める西洋の知識と教養とは何を指すのか、「日本従来の美徳」とはどのようなものであり、「東洋の女徳」とどのように異なるものなのか、何故下田は「東洋」ということを強調し、それを西洋のものとどのように区別して認識していたのか、どのように西洋のものを導入しながら西洋の文明に抵抗しようとしたのかは、これまで十分に論じられていない。また、下田が本当に抵抗したかったのは西洋「文明」のどのような点であったのか、そして「日本の美徳」または「東洋の女徳」を、下田は教育実践を通してどのように女性に身につけさせようとしたか。彼女の教育実践の変遷を見ることによって、下田の女子に対する要求の変遷も明らかにできよう。

私は今後このような作業を通じ、下田が考えた理想的な女性像がどのようなものであり、それらは「良妻賢母」という言葉で表すことがふさわしいものであるかといった問題点を、研究課題として検討していきたいと思っている。これらの内容を明らかにすることは、「良妻賢母」思想の変容及び近代女子教育の現状を理解することにも役立つと考えられる。さらに、中国へ伝播された下田の「良妻賢母」主義についても考えていくことで、近代日中女性史を理解する上でも極めて重要なヒントが得られるであろうと考えている。

# 下田歌子先生について Ⅲ

窓日短歌会元同人
村上　廣元

下田歌子



下田歌子　春月
（実践女子大学図書館所蔵）

春月

たまくらは
花のふゞきに
うづもれて
うたゝ寝寒し
はるのよの月

## 奥床しい人柄

御題「春月」に、鉥さんが詠進した二首、

大宮の玉のうてなにのぼりても
なほおぼろなり春の夜の月（うてなは、台、高殿）

手枕は花のふゞきにうづもれて
うたゝ寝さむし春の夜の月　（歌集七九頁）

に対して、伝記は、最高の讃辞を呈しています。また、国文学者塩田良平は、「古雅にして余情を含む格調高い」代表作としながら、「皇后から歌子の名を賜った二首と伝えられるが、真偽は別問題」と述べています（『明治文学全集』筑摩書房 昭和四一年刊）。

そこで私は、歌子先生が名誉ある事実を意図的にぼやかした……、即ち〝自己韜晦〟をしておられるのだ、と推測して、先生の奥床しい人柄を偲んでおります。

うらうらの春の日、鉥さんは、女官の仲間連れで若菜摘みに出かけて、

山里の雪のしたくさ枯れずして
春のひかりにあひにけるかな　（歌集一四〇頁）

と、詠みました。上の句には、祖父も父上も勤皇思想を抱くが故に、不遇に処された家庭環境と、幼いながら糸繰車を廻すなどして家計を助けた自分とが、オーバーラップされています。下の句では、計らずも後宮に出仕して、皇后を始め女官仲間から大切にされるようになった恩愛を、身一杯の「春のひかり」として詠んでいます。若菜摘みの春、鉥さんは、青春真っ直中の満一八歳でした。

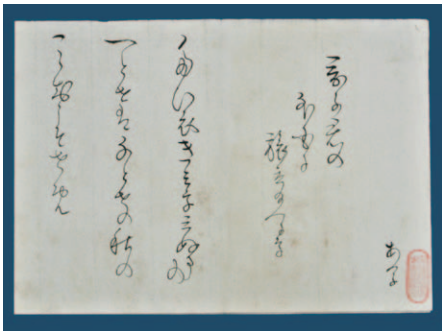
当時、皇室に対して人民は〝民草〟と呼ばれました。それに関連させて〝下草〟は後宮の女官の謙称だったようです。しかし、先生の場合、〝雪の下草〟への思い入れが深く、山里生れのご自身の境涯を謙虚に形容することばでした。このことばを喜寿記念の歌集名とされたのも、ふとした思いつきではなく、慎重な配慮による結果であり、奥床しい人柄の反映であったと、私は思います。

## 税所敦子との交際

歌子先生に大きな影響を及ぼした歌人に、税所敦子がおりました。略歴を記します。

税所敦子（一八二五―一九〇〇）　京都の武家の林篤国・栄子の長女。一七歳の時父が、二三歳の時母が死去。歌道で同門の薩摩藩士税所篤之と二〇歳で結婚。夫は一五歳年上で亡妻との間の二児がおり再婚。長女徳子が三歳の時、夫が四三歳で病死。敦子は懐妊中だったが、出産後の男児も死亡。徳子を伴い京都から鹿児島へ。姑・先妻の二児・義弟の家族・使用人など一二人家族の世話。三三歳の時、藩主島津斉彬の若君哲丸の傅育役（保母）。病死の哲丸に殉じようとしたが姑が阻止。島津家の貞姫が近衛家に輿入れの際、後見役で、一三歳の徳子を伴い京都へ。鉥さんの師だった歌人八田知紀に師事。近衛家東京移転に伴い、東京へ。御歌所の高崎正風の推挙により、歌道における皇后の相手役と女官の指導に当たる。以後、逝去に到るまで

税所敦子
（心つくし／税所敦子著；屋代熊太郎註釋
東京：泉文社．六盟館（発売），1913．1）



税所敦子　歌子の君の外国に旅立給へるを
（実践女子大学図書館所蔵）

歌子の君の外国に旅立給へるを
たび衣　きミをみぬまの
一とせは千とせの秋の
ここちこそせめ

の二五年間、皇后に重用された。

明治八年（一八七五）春、敦子は、歌御会にて紹介されました。時に敦子五〇歳、歌子先生二〇歳でした。当時の常識で五〇歳は老女、しかし、紅葉の如く美しい敦子は、〝楓内侍〟と呼ばれました。歌道の同門と知った二人は、忽ち肝胆相照らす間柄となりました。女性としての辛酸を若い時から嘗め尽くして来た敦子を、先生は〝楓の君〟と呼び、人生の師として母の如くに慕っておられました。伝記は、「性格も、嗜好も、この先輩と後進とは、ぴったり合致……」と記します。

歌子先生は、後宮を辞して下田猛雄剣術師範と結婚されました。しかし、奔放不羈の夫君は、深酒による胃病で厚い看護も空しく、四年七カ月後に逝去されました。この時、敦子は、心底からの同情の短歌を二九歳の歌子先生に寄せています。不幸にして夙に寡婦となった二人は、その後、友情をいよいよ深め、女子教育への夢を語り合ったのでした。

## 実践女学校への声援

歌子先生の女子教育振興の意欲に、敦子は、深い理解と賛意を示し、数々の助言もなしたと伝えられます。明治三二年（一八九九）、歌子先生の尽力により実践女学校が開設の運びとなると、敦子は、一首を寄せました。

をとめ子の学の窓の呉竹は
ふしたたざるやみさをなるらむ（税所敦子歌集）

女学校の窓辺の呉竹は、節を整えないで成長することはない。それと同様に、乙女たちもこの学舎で操正しい女性に成長するであろう、という慶祝と嘱望の一首です。しかし、この喜びも束の間、敦子は、仮初の病にて急逝致しました。歌子校長先生は、驚愕悲痛、初七日の法要を実践女学校にて、教職員女子学生全員出席のもとに、明治三三年（一九〇〇）二月一〇日に営んでおられます。その折の先生の弔辞の冒頭を伝記から引用します。在りし日の友情を偲ぶ名文です。

「わが道の親心の友と頼みきこえまゐらせし君よ。君はなどて我れを打ち捨てて、一人かへらぬ旅には出で立ち給ひぬるぞ。生るる日はともにせずともなど云ひかはしつつ、夜ぶかき月を眺めて、泣き笑ひ打ち語らひつるも、ただ昨日のこととのみぞ覚ゆる。」

弔辞の中で、先生がご自身を〝雪の下草〟と称しておられる点にも、私は注目します。

## 歌集『御垣の下草』と『雪の下草』

税所敦子は、明治二一年（一八八八）に歌集『御垣の下草』を出版。この歌集は、婦人の詠歌入門書と言われた程、有名になりました。その後、歌集は、増補されたようです。

『雪の下草』は、昭和七年（一九三二）、歌子先生の喜寿記念の出版でした。二つの歌集名の似通っているのは、決して偶然ではなく、実践女学校の発足に結実した深い友情を後世に伝える、いわば〝共同のメッセージ〟であると、私は思います。

（完）

# 下田歌子先生世界一周教育視察 1

下田歌子研究所
奥島　尚樹

## ―序―

実践女子学園創設者下田歌子先生の欧州教育視察について、今まで調査が進んでいなかった、旅程や移動手段などを中心に調査を行っている。

これまでは、下田先生の欧州教育視察に関しては、「外遊」「渡欧」「欧州視察」「欧州教育視察」等と記述され、日本と欧州を往復したようなイメージで語られてきている。実際の往復の船旅は、往路は横浜港からマルセイユ港、復路はバンクーバー港から横浜港であったことが分かり、「下田歌子先生傳」p. 264にあるように、世界を一周されたことが確認できた。アメリカにも寄られているが、その移動手段や経路については現時点では推測の域であり、今後も調査を継続し、その旅程をより明らかにすることで、この教育視察における下田先生の航跡を辿りたいと考えている。

下田先生が視察された頃の欧州では、産業革命が進み、土木技術（橋梁建設、鉄筋コンクリート建設技術）の進歩、移動手段の高速化（道路網、鉄道網の整備）が進み、郵船・電信などの情報通信網の整備が進められるなど、社会のインフラ整備が着々と進み、科学技術の急速な進歩が一般社会のレベルにまで浸透してきていた時期であった。当然教育についてもしかりであったろう。この時期に欧州を旅したことは、まだ産業革命の端緒についたばかりの日本と比較することで、日本の社会の将来像を予測するに大変良い時期であったと考えられる。

時間の経過により不明な点も多いが、大学図書館及び下田歌子研究所が所蔵している資料を基に、外部の機関等とも連携できるだけ正確に視察の旅程を明らかにしていきたい。

## ―横浜出航―

明治26（1893）年9月10日（水）午前9時20分横浜港を出港。(①)　乗船はフランス船籍「メルボルン号」（総排水量4,012トン3デッキ）。船主は「Messageries Maritimes」。船種は貨客船。(②)

船の大きさは、横浜山下埠頭に係留されている「氷川丸」（11,000トン）の約半分程度。※船の詳細については「Lloyd's Register」より

図1：メルボルン号
（Messageries Maritimes : L'ENCYCLOPEDIE DES MESSAGERIES MARITIMES より引用）

図2：旅券下付・返納資料
外交史料館（外務省）マイクロフィルムより
『海外旅券下付（附与）返納表進達一件』　本省発行より引用）

横浜港では、学校関係者約50名以上が見送る。(①)

旅券に関しては、発行・返納の記録が外交資料館で見つかり、当時は帰国後30日以内に旅券を返納する義務があり、返納日付が同日であることから、堀江義子氏が「従者」として同行していたことは確認できた。今後は、全行程同行したか否かの確認ができたらと考えている。

旅券は返納されていて現物の確認はできないが、外交資料の中に保存されている可能性もあり、現在外交資料館で調査中である。

図3：スエズ運河を通過するメルボルン号
（Messageries Maritimes : L'ENCYCLOPEDIE DES MESSAGERIES MARITIMES より引用）

【出航に関わる記事・記録等】
①『下田歌子伝』p. 233 - 234
②『Japan Weekly Mail』Sept. 16th 1893
③『読売新聞』明治26年9月10日出港の記載
④『読売新聞』明治26年9月12日
- 見送りへのお礼の広告掲載

## ―マルセイユ到着―

マルセイユには明治26（1893）年10月19日に到着。(⑤、⑥)ここまでの行程に40日を費やしている。

【マルセイユ到着に関する記事・記録等】
⑤『下田歌子先生傳』p. 240 - 241
⑥『読売新聞』明治26年12月5日（朝刊3ページ）
- マルセイユ到着のお知らせ

当時のマルセイユには日本領事館があり、記録等の所蔵に関し外交史料館で調査を行っている。当時各国に置かれ始めていた領事館は、旅程に支障がないよう支援を行って

図4：横浜からマルセイユまでの Messageries Maritimes 社の航路
（Messageries Maritimes : L'ENCYCLOPEDIE DES MESSAGERIES MARITIMES より引用）

いたと推測しており、当時の領事館報告書等の公文書に何らかの記載があるのではと期待している。

マルセイユ到着からの移動に関しては、現在のフランス国鉄（SNCF）が中心となりフランス全土に広げていた鉄道網の中に、P（パリ）L（リヨン）M（マルセイユ）をつなぐ PLM 線（現在も同名称）があり、下田先生たちはおそらくこれを利用してパリまで移動したものと考えられる。

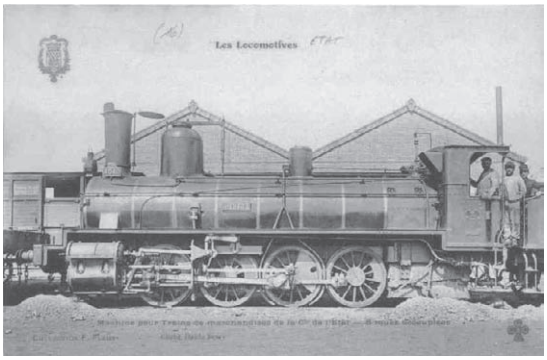



図5：当時の機関車の写真
（Locomotives & autorails du réseau de l'Etat HP より引用）

## ―パリ→ロンドン→ヨーロッパ各国―

パリからロンドン及びロンドンからヨーロッパ各国への移動に関しては、これから細かな航路・路線等を調べることとしている。

また、ロンドンから帰国のための船が出港したバンクーバーまでの移動手段。アメリカに寄られた旅程はどうだったのか。バンクーバーから横浜への直行船で帰国されていることから、出港はバンクーバーである。よって、大西洋から太平洋の港までの移動手段を現在調べている。パナマ運河のない時代なので、南米回りでバンクーバー移動は考えられない。

おそらくはカナダ太平洋鉄道（Canadian Pacific Railway）を利用したものと考えて、調査を進めている。

## ―横浜帰港―

明治28（1895）年8月5日バンクーバー港を出航。同年8月19日に横浜港着。（「下田歌子先生傳」では、8月20日となっているが、資料⑧によると8月19日に到着している。）乗船は英国船籍「Empress of India：インドの皇后号」（総排水量5,905トン 3デッキ）。船主は「Frazar & Co.」（Canadian Pacific Railway）。（⑧） 船種は「郵便と一般」。船の大きさは、横浜山下埠頭に係留されている「氷川丸」（11,000トン）の半分よりやや大きめである。※船の詳細については「Lloyd's Register」より

図6：Empress of India（Wikipedia より引用）

この船は、RMS（Royal Mail Ship）という郵便船で、バンクーバーから横浜までの直行便で、15日間で太平洋を横断した。

【横浜帰港に関わる記事・記録等】
⑦「下田歌子先生傳」p. 264
⑧『Japan Weekly Mail』Aug. 24th 1895

## ―考察①―

下田先生が往復に使用された船や旅券については分かったが、まだ分からないことはいろいろとある。お持ちになられた荷物の量を推測すると、従者は堀江氏一人だったのかどうか。また、「下田歌子先生傳」によると、源氏物語と枕草子をお持ちになったようだが、その他にお持ちになった荷物はどのようなものだったのか。この視察旅行に関し、当時の日本国はどのように旅行の安全をサポートしたのか。旅の途中で下田先生はどのような方々とお会いしたのか。特に船旅に際しては、往復の船の航海日誌や乗船名簿が残っていないかが、非常に興味深いところである。

下田歌子研究所としては、周辺の調査も含め下田先生に関連する資料の収集を図っており、関係する情報をお持ちの方は是非ともご連絡いただきたい。

下田歌子研究所シンポジウム

# 「学祖研究の現在」

グローバル化や社会・経済構造の変化、少子化等によって、研究・教育機関としての大学のあり方や意義が問われるようになってきています。そしてそのような動きを受けて、少なからぬ大学で、建学の精神・学祖の志にあらためて立ち返ろうという気運が高まっています。
それぞれの大学は今どのように学祖研究を進め、そしてそこから何を学ぼうとしているのでしょうか。
各大学で学祖研究を進めてこられた先生方をお招きして、「学祖研究の現在」を考えていきたいと思います。

2015年11月21日（土）
14：00 - 17：30（開場13：30）
実践女子大学
実践女子大学短期大学部
渋谷キャンパス　創立120周年記念館 403教室
※先着250名／入場無料・事前申込不要

パネリスト

**日本女子大学と創立者成瀬仁蔵**
片桐 芳雄（日本女子大学名誉教授）
熊本県出身。専門は教育学、日本教育史。元日本女子大学人間社会学部長。著書『自由民権期教育史研究』他。

**東洋大学における井上円了研究の現状**
竹村 牧男（東洋大学学長）
東京都出身。専門は仏教学、宗教哲学。筑波大学教授などを務める。著書『日本仏教―思想のあゆみ』他。

**学祖山田顕義における「人間の条件」と日本大学の建学の精神のかたちと変遷をたずねて**
勢力 尚雅（日本大学教授）
千葉県出身。専門は倫理学、イギリス経験論。放送大学客員教員などを務める。著書『科学技術の倫理学Ⅱ』他。

**女性が社会を変える、世界を変える**
湯浅 茂雄（下田歌子研究所所長）
東京都出身。専門は国語学。前実践女子大学学長。著書『生まれることば 死ぬことば』他。

コーディネーター
伊藤 由希子（下田歌子研究所主任研究員）
神奈川県出身。専門は日本思想史。東京大学死生学・応用倫理センター研究員などを務める。
著書『仏と天皇と「日本国」』他。

お問い合わせ：実践女子学園 下田歌子研究所　TEL 042 - 585 - 8945　HP http://www.jissen.ac.jp/shimoda/

**お詫びと訂正**　『下田歌子研究所ニューズレター』No. 04に一部誤りがありました。訂正し、お詫び申し上げます。
p. 05 「新収資料紹介」の「水邊萩」　誤：あげまきがにほひいれこし路ならじ　正：あげまきが牛おひいれし跡ならし

『ニューズレター』No.05
発行：2015年11月　発行人：湯浅茂雄　編集人：伊藤由希子　竹田真由子　発行所：実践女子学園 下田歌子研究所
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1　電話・FAX：042 - 585 - 8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
印刷：日野テクニカルサービス株式会社